

てね故に昭和七年春から夏にかけて反資本主義的愛國運動は、正に最高潮に達したの
である。しかるに早くも七年末頃乃至八年の始めから次第に衰退し初めた。

てねにも幾つかの原因があるが、その最も重むるものは為替低落によつて日本商品
の海外進出を強め、先づ紡績、雜貨業の好況となり、外貨輸入を阻止することによつ
て國內産業を振興し、所謂為替暴落を現出したことである。更にソレにも増して有力
であつたのは軍需品インフレ暴落である。

こねが打續く不況と、その深刻化のため、絶望的気分に閉ざれてゐた人達を、まア
まアと一應解放したことである。

今一つは最初反資本主義的皇道主義に徹底すると傳へられた軍部の妥協的甘柔で
ある。しかも時を經るに従つて財閥の壓迫を受け、遂に滿鉄改組案をめぐつて、軍部
對行務大藏（現制度を代表する）の對立抗争には財閥が滿鉄社債發行不振をよつて酬
ひた。

てねでも断乎たる決心をすることの出来ぬ軍部は、最早滿洲專管時の期待をかけ
られぬのが當然であり、かくて反資本主義的愛國運動は、次第に下火になつて行つ
たのである。

しかしながらこねによつて、一切が解消してしまつたのではなく、寧ろ原因は根深
く横がリつゝあるのである。唯、餘りにも期待すべからざるものに期待し過ぎ、また
この世界的不況期に、とと角日本は輪替関係と、軍需インフレと、安き労働賃銀と、
労働強化によつて、あるブルジョア新聞をして「他國はいざ知らず、日本はコレから
が資本主義の繁榮期に入るのだ」とほざかすに至つてゐるのである。

五 日本の經濟と労働階級

かくの如く日本は、とと角インフレ暴落にめぐまれてゐるのである。こゝで一々数
字をあげないが、今まで省るとのどまかつたボロ株の相場がハネ上り、新設計畫が次
から次と北浜の市場に現はれるのを見て、資本家にとつて正にインフレの春である。
しかし乍ら果して労働者はドウであるか？ 二年前、失業と減給と強化の嵐が吹き
捲つた時よりはいくらか生色あるとしても、果して労働者にインフレの春が訪れてゐ